

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2005～2008
課題番号：17520245
研究課題名（和文）古文献によるアイヌ語史の構築
研究課題名（英文）The Reconstruction of the History of the Ainu Language by Old Documents

研究代表者
佐藤 知己 (SATO TOMOMI)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：40231344

研究成果の概要： 現存するアイヌ語の古文献を 17 世紀前半、18 世紀前半、18 世紀後半、19 世紀前半に区分し、代表的なものを分析し、各時期の特徴を明らかにした上で、400 年間にわたるアイヌ語の通史について一応の見通しを与えた。概略的には、17 世紀初頭の文献にみられる音韻、文法、語彙の特徴が、18 世紀初頭では失われる傾向があり、18 世紀後半では急激な変化が起きたということを文献を用いて実証的に明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	900,000	0	900,000
2006 年度	800,000	0	800,000
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,200,000	450,000	3,650,000

研究分野：アイヌ語

科研費の分科・細目：言語学・音声学

キーワード：アイヌ語、古文献、言語史、方言、音変化、文法変化、語彙の交替

1. 研究開始当初の背景

(1) この研究分野についてはこれまで個々の文献に関する文献学的な研究は多少あったが、言語学的な点にまで踏み込んだ研究はほとんどない状態であった。

(2) 本代表者による以前の科学研究費による研究により、新しい資料の蓄積、整理がかなりの程度行われ、言語学的な分析の準備作業がかなり整っている状態にあった。

2. 研究の目的

(1) 各時代の言語的特色を明らかにする。

(2) 明らかとなった各時代の特徴を、17 世紀から現代に至る、一貫した流れとして、アイヌ語史を構築する。

3. 研究の方法

(1) 17 世紀、18 世紀前半、18 後半、19 世紀前半の文献を分析し、そこに共通して現れた言語的特色を整理する。

(2) 現代の言語資料も参考にしながら、それぞれの時代の特徴と思われるものがどのように変遷していったかを一つにまとめ、アイヌ語史として提示する。

4. 研究成果

(1) 17世紀前半の文献資料に現れる、不可解な撥音のアイヌ語表記は、実際には促音を意図したものと考えられる。これは、この時期の前後の日本語表記において撥音、促音の表記が確立されておらず、促音の表記に撥音が用いられることがあったためと考えられる。また、この発見から、現在最古と考えられているアイヌ語資料「松前ノ言」の成立年代が、江戸初期から、江戸以前の室町末期に遡る可能性が明らかとなった。

(2) 17世紀前半の資料に現れる、現代のアイヌ語とは異なる形式（現代の arwanpe 「七」に対して、「あるわんふ」のような、「ペ」ではなく、「ふ」と表記されるような形式）は、この時期のアイヌ語にはいわゆる「あいまい母音」が存在し、後に e と合流したと推定される。

(3) 17世紀前半のイエズス会士の記録にあらわれる語頭の ye は、現代の形式では e で現れるが、これは言語的変遷によるものではなく、当時の宣教師の表記により、日本人によるカナ書きのアイヌ語資料をローマ字翻字したために起こった誤りであると考えられる。したがって、イエズス会士の資料を扱う場合には慎重な考慮が必要である。

(4) 同じくイエズス会士の記録では、現代の語頭の ha を fa で書いているが、これも言語的変遷によるものとみるべきでなく、カナ資料をローマ字翻字したことに由来するとみるべきである。

(5) 17世紀前半にみられる長母音表記は18世紀前半の文献にもみられるが、種類が次第に少なくなり、ゆれも多くなる傾向がみられる。これは、長母音が失われ、短母音化する過程が進行したものとみることができる。

(6) 一部の語は、18世紀後半の資料に至っても長母音的な表記を保っているものがみられる。これは一部の方言には母音の長短の区別がこの時期にもわずかながら残っていたことを示唆する。

(7) 19世紀前半の資料にみられる長母音表記は、大部分が強調によるイントネーションか、一種の類推によって生じた余剰的な特徴

を記したものとみられ、この時期には母音の長短の区別はほとんど消失していたと推定される。

(8) 18世紀前半の資料では、あいまい母音の存在を示すような現象が見られず、この時期までにはあいまい母音は e に合流していたとみられる。

(9) 17世紀前半、18世紀前半の文献では、pirka「よい」の r を「リ」でなく「ル」と書く傾向が著しい。少なくともこの語に関しては、現代とは発音が異なっていた可能性を示唆する。

(10) 語彙的特徴としては、17世紀前半、18世紀前半の文献では、aynu にあたる語が見られないか、「長者」のような尊称と思われる訳語が与えられており、現代とは異なる意味であったと推定される。また、「女」を意味する語は「メノコシ」という現代には報告のない形が記されているのが特徴的である。なお、現代では「成人男子」を意味する okkay にあたる形式が「少年」という幾分違った意味であったことを示す証拠がこの時期の文献に共通してみられることも注目される。

(11) 最古の文献から現在に至るアイヌ語の変遷を簡潔に示すと、17世紀前半（長母音の存在、あいまい母音の存在、現代と異なる語、発音、意味の存在）→18世紀前半（長母音の短母音化の進行、あいまい母音の消失、現代と異なる語、発音、意味の存在）→18世紀後半以降から現代へ（長母音の短母音化の終了、現代と異なる語、発音、意味の消失、変遷）という流れが推定される。これは、18世紀後半がアイヌ語の変化の最も激しかった時期であったことを示唆する。

(12) 古文書のアイヌ語を研究するためにはまず資料となる文献そのものに関する文献学的研究が必要である。この点に関し、この間に明らかにしえた重要な成果は、世界最初の刊行されたアイヌ語辞書である藻塩草に関するものである。従来、藻塩草には初版と再版の二種があり、初版（一冊本）が優れているとされて来た。しかし、実際に初版、再版を数種類集めて検討すると、初版の重要性は言うまでもないが、再版のほうが版面の良好なものもあり、無条件に初版のみを重視し、再版を無視してよいということにはならない、ということを示唆した。

(13) 古文書のアイヌ語を研究するためにはまた、現代のアイヌ語諸方言に関する研究が不可欠である。この点に関して明らかになった主要な成果は以下の通りである。

・アイヌ語千歳方言には「完了」の形式として a と wa an という形式があるが、前者は間接的結果、後者は直接的結果を含意する形式とするのが妥当である。間接、直接両方を「ている」で表現できる日本語とはこの点で大きく異なる。

・間接的完了の a は、さらに「過程」の意味を主として表し、「効力」(経験)を一義的には表せない、という特徴を持つ。

・アイヌ語千歳方言の資料に基づいてアイヌ語の動詞語幹を含む合成名詞構造を分析した結果、従来、合成名詞のうち「修飾構造」を有する、とされていたものは、本来的には句単語とみなすべきもので、アイヌ語の合成名詞全体からは周辺の構造であること、他方、「疑似修飾構造」と呼ばれ、二次的な扱いを受けていた構造こそがより適格な合成名詞構造であることを指摘した。

・アイヌ語の二種の再帰形は従来は意思・無意志の別を表すとされてきたが、千歳方言の資料を用いて分析した結果、直接的再帰、間接的再帰、という区分を立てたほうが、従来の説明では説明不能な例までも説明可能となることを指摘した。

・資料が少ない噴火湾沿岸地方の方言を古い録音資料によって文字化し、言語学的に分析し、特異なアスペクト形式の存在、江戸時代のアイヌ語表記法に対応するとみられる後部歯茎摩擦音に相当する発音の存在を指摘した。また、これらの資料が従来の口承文芸資料の枠を超えた興味深い特徴を持つことを併せて指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

①佐藤知己. 「アイヌ語虻田方言の英雄叙事詩(yukar)テキストとその言語的特徴」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』15. 北海道立アイヌ民族文化研究センター. 1-38. 2009. (査読有)

②佐藤知己. 「18 世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について」. 『北海道大学文学研究科紀要』127. 北海道大学大学院文学研究科. 29-58. 2009. (査読無)

③佐藤知己. 「アイヌ語古文獻における言語学的諸問題」. 『北海道大学文学研究科

紀要』124. 北海道大学大学院文学研究科. 153-180. 2008. (査読無)

④佐藤知己. 「伊達地方のアイヌ語方言の言語的特徴」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』14. 北海道立アイヌ民族文化研究センター. 1-54. 2008. (査読有)

⑤佐藤知己. 「アイヌ語千歳方言における合成名詞の構造」. 『北方人文研究』1. 北海道大学大学院文学研究科. 55-67. 2008. (査読有)

⑥佐藤知己. 「再びアイヌ語千歳方言のアスペクトについて」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』13. 北海道立アイヌ民族文化研究センター. 1-14. 2007. (査読有)

⑦佐藤知己. 「アイヌ語のアスペクトと日本語のアスペクトの対照」. 『日本語学』26-3. 明治書院. 44-52. 2007. (査読無)

⑧佐藤知己. 「アイヌ語千歳方言の再帰接頭辞 yay- と si- について」. 『認知科学研究』5. 室蘭認知科学研究会. 31-39. 2007. (査読無)

⑨佐藤知己. 「アイヌ語千歳方言のアスペクト」. 『北海道立アイヌ民族文化研究センター紀要』12. 北海道立アイヌ民族文化研究センター. 43-67. 2006. (査読有)

⑩佐藤知己. 「アイヌ語地名研究と言語学」. 『アイヌ語地名研究』8. アイヌ語地名研究会. 153-180. 2005. (査読無)

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 3 件)

①佐藤知己. 『アイヌ語文法の基礎』. 大学書林. 392. 2008

②佐藤知己. 「アイヌ語研究の課題と展望」. 煎本孝・山岸俊男(編)『現代文化人類学の課題』. 世界思想社. 186-202. 2007.

③佐藤知己. 「日本語とアイヌ語」. 吉田
金彦(編)『日本語の語源を学ぶ人のために』.
世界思想社. 153-160. 2006.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 知己 (SATO TOMOMI)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：40231344

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし